
破壊神殺しの転生者

ハタハタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊神殺しの転生者

【Nコード】

N16920

【作者名】

ハタハタ

【あらすじ】

テロに巻き込まれて死んでしまった青年は、500年神を封印し続けている一族に転生した……

転生（前書き）

稚拙な文ですが、改善していきたいと思っています。アドバイスを感想に書き込んで頂ければ、随時反映していきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

転生

望むは平穩。だから何かに秀でないよう、何かに劣らないように生きてきた青年はこのまま死ぬまで何も起こらず、そして何も起こさずひっそりと生きていくつもりであった。だが、訪れてしまった非常事態。青年の一生はここで終末を迎えたのだった。

第一話 転生

アメリカに行く飛行機の中で、怪しげな服装をした三人の男達が銃を構えて乗り込んできた。二人の男は前の方へ言ったが、ここには一人残った。どうやら自爆テロをするらしい、馬鹿馬鹿しい。それだけの装備をそろえる事が出来るなら、その金を貯金しておけばいい物を……。それに平穩な暮らしがしたいだけの俺に迷惑をかけないで欲しい。

「テロなんて馬鹿のすることだ」

「おい、その男もいつぺん言ってみろや！」

どうやら思っていた事を口に出してしまったらしい。まあ死が早まるだけだ、このさい好き勝手やらしてもらおう。

「だから、テロなんて頭悪いなあって言ってたんだよ！」

「それ以上言ってみろ、お前から殺すぞ！」

「殺してみるよ、どうせ全員死ぬんだったら順番なんか関係ないね。それに、ただ殺られるだけだと思うなよ！」

言葉にしてはつきりと分かった。俺は完全にキレている。普段は温厚で人生で怒った事なんて片手の数もない。キレるなんてもって

のほかだ。それは俺の周りの人の性格が良かっただけなのかは分からないが、とにかく俺はキレている。

「そうか、なら遠慮はいらんみたいだな。俺も実践で銃なんて初めて使っんだが、こうすれば確実に殺せるだろ！」

そう言い、俺の近くまで寄ってきて心臓あたりに銃口を突きつける。

「怖じ気づいたのか？」

動かない俺にそう言ってくる男。ニタニタ笑っていて、とても気持ち悪い。

「今ならまだ助けてやるぞ、つってもすぐに死ぬけどな」

「別にいらん。てか、お前がしねよ」

男の首を力一杯締め上げる。男が抵抗して、銃を撃ってくるが締め上げている手の強さは変わらない。すぐに、男から力が抜けどさりと倒れた。

「銃なんだから、遠くから撃てよ。じゃあ完全に殺してやるよ」

男の持っていた銃を拾い上げ、安全装置を外して男の額をねらう。

「じゃあな」

乾いた銃声と共に男の息の根を絶った。男が撃った弾は二発で、足に一発そして、もう一発は見当はずれの所に飛んでいった。

「ふむ、まだ余力があるな。こいつが間抜けすぎつても大きな要因だろうな……」

よし、この際だからあと二人の男も殺しておこう。右足を引きづりながら、俺は前へ進む。

「おい、貴様は何故ここにいる!？」

前方にいたもう一人の男に怒鳴られた。俺は、手に持っていた銃を構えて男に向けた。

「さっきの銃声はお前か……。全く、あいつも間抜けだな」

そう言いながらも、相手は瞬く間に銃を構えていた。俺は、構えていた銃の引き金を迷わず引いた。しかし、男も発砲したのか腹が熱くなった。興奮しているのか、痛みはなく男が倒れたのを見届けて前方へ歩く。先ほどとは違い、フラフラとした足取りで押せばすぐさま倒れてしまいそうだ。それでも歩き続けて辿り着いた操縦席。最後の男は操縦士の頭に銃を押しつけていた。完全にこちらに背を向けていたので、頭に一発。あっさりと片が付いた。ごめん、父さん、母さん、里奈、もう生きて会えそうにない……。俺の意識は完全に途絶えた。

- - - - -

意識が戻った。もう死んだものだと思っていた分、自分の生命力に驚かされる。体を起こすと、自分のいる部屋が見慣れない和式の部屋という事がわかった。そして、身長は180?はあったはずなのだが明らかに小さい体。どうもおかしい、というかこんな現象はありえないはず。夢でない事は何となく分かる。

これが転生ってやつか。俺は、直感的にそう思った。

森上一族

転生、それは元の魂を自分の魂で上書きすることではないだろうか。そう考えると、俺は何の非もない二歳児を殺したという事になる。ならこの罪はどう償えばいいのか……。

第二話 森上一族

布団を畳み、襖を開ける。目に入る光景に啞然とした。なんと行き止まりが見えないのだ。迷ってはたまらないので、先ほどの部屋に戻る。そういえばこの部屋も広いなと思い直した。しかし、この体の持ち主の魂はいつたいていどうなっているのか。俺が完全に上書きしたのか、まだ大丈夫なのか。俺は一度死んだ身、意識がある事の方が異常なのだ。いずれこの体の持ち主に返せる日が来る事を祈っておこう。

「蒼夜、起きなさい」

その声と共に襖が開かれる。入って来たのは、長身で美形な女性。この体の持ち主の母親かなと推測しながらも、おはようございますと返事をする。

「あら、今日は早起きのね。いつもはまだ寝ているのに」

「はい、今日は良い一日になりそうです」

「それは良かったわね。でも、今度から早く起きたら居間に来なさ

いね」

「はい、気をつけます」

母親らしき人物と共に長い廊下を歩くこと五分、長い廊下の端から端までの真ん中あたりの部屋で母親らしき人物は立ち止まった。壁には丁寧にも「居間」と書かれていた。やはり、これだけの部屋数があれば家の者でも迷うのだろうか？

「早く中に入りなさい」

惚けてしまっていたが、声が掛かると気を取り直し襖を開ける。

「うわっ……」

中は旅館の大広間の様に広々しているが、真ん中にちよこんと丸い机が置かれていて、はっきり言って場所の無駄遣いだ。

「どうしたの？早く席に着きなさい。みんなあなたの事を待っていたのよ」

その言葉に一瞬ゾクリとした。まるで、蒼夜ではなく転生した俺に向かって言っているようで……

「誰に言ってるんだ？」

そう聞いてしまった。いや、これ以上蒼夜のまねごとをしたくなかった俺の本心が、そう言ってしまったていた。

「もちろん、蒼夜の体に転生したあなたにいつてるの。いずれは森上家当主になるであろうあなたにね」

「なぜ……」

「もちろん蒼夜に適正があつたからに決まってるじゃない。それにさつきあなたが蒼夜でない事を確認したわ」

「蒼夜はあなたの息子じゃないのか？」

「息子よ。いえ、息子だったと言えば良いのかしら。どちらにせよあなたの体と私の体には血が通っているわ」

それを聞いて拳に力がこもる。何だこのクソみたいな一族は、適正があつたから息子の魂を殺すだと……

「ふざけんな……」

「何よ、あなたが此処にいるってことは死にかけの魂だったって事じゃない。命が延びたんだから、感謝しなさい」

その言葉に俺の衝動を抑えられなくなった。どんな事情があるにせよこの態度だけは許せない。

「ふざけんなって言ってんだよ！なんだよ適正があつたからって、それでもこの子の……蒼夜の母親なのかよ。なんで平然としてられるんだよっ！」

「……」

「何か言えよっ！それに俺は転生したとしてもこれっぽっちも嬉しくない。むしろ蒼夜に悪い、なあ今からでも遅くないから……」

「うるさい！本当に私が何とも思っていないと思うの？私だって大切な我が子を殺したくなかったに決まってるでしょ！？」

「ならなんで……」

「あなたには想像出来ないかも知れないけどこの一族は神を封印しているの。その神が強すぎて封印も五十年と持たないのよ。神が解き放たれば大変な事になるでしょ。殺す術は有るけれど、この呪われた一族はね、自信の系譜の者がその神を殺す事を望んだのよ。」

ただ血族だけじゃすぐに限界が来た。そこで転生の儀を発見してたびたび転生者を系譜に取り入れたのよ。狂ってるでしょ？」

そう言っただけでなく笑う蒼夜の母は膝から崩れ落ちるように地面に座り込んで手で顔を覆う。森上家としての仮面を被る事で平常心を保っていたみたいだが、泣いている姿は一人の母親の姿だった。

「なら、この狂った一族を俺の代で終わらせる。それが蒼夜に対する罪滅ぼしになるだろ」

自然と言葉が出ていた。神という俺にとって全く知らない存在であつても不思議と負ける気がしない。誰がなんと言おうと、俺が殺すという意味だけが全て無くした俺を満たす。

「よく言った。なら明日からは修行を始めるぞ」

今まで静観していた爺さんがそう言ってきた。望む所だ、どんな修行だって耐えられる。今の俺にはそれだけしかないんだからな。

「分かった。どんなキツイ修行でも耐えてやるよ」

「そうかそうか、では死んだ方がマシと思うような修行にしてやるから楽しみにしておくんだな」

次の日から四年間、肉体年齢が6歳になるまで毎日地獄のような修行が行われた……

森上一族（後書き）

短いすかね……

要望があれば長くしていきたいと思っています。

青銅の鋸

少年と神との対峙は、その少年にとって、そして一族にとって、大きな転換を迎えることになる。その転換は彼らにとって、良いものになるのか、それとも……

第三話 青銅の鋸

爺さんの修行が始まって四年経った昨日。俺はついに爺さんを超えることができた。爺さんは今いる一族の中で一番の実力者らしいので、俺が一族の中で一番強いということだ。しかし神と戦うにはまだまだ火力が足りない。どうすればいいのか……

一族の戦闘方法は、思考の加速によって自身の見る景色を遅くし、相手の攻撃を完全に見切り自身に有利になるように事を運ぶ、というような戦闘方法だ。これなら相手の攻撃に当たることはまずないし、対人戦なら最強と言っても過言ではないだろう。しかし、俺は神と戦うのだ。人間のように一撃で仕留めることはできないだろうし、もしも範囲が広い攻撃でもされたら物理的に避けることが出来ない。

もっとよく考えろ、何かいい案があるはず。俺は並行思考と思考加速を全力で使い、考える。考える。……頭が焼き切れそうだ。だが、もう少しで何かが出て来そうなんだ。

そういえば、人間の脳にはリミッターが掛かっている火事場の馬鹿力なんかは一度、そのリミッターを外している状態だったはず。それをどうにかして、人為的に起こすことができるか？この頭が焼き切れる感覚がリミッターが、焼き切れている為だとしたら……

俺は頭が焼き切れる感覚を無理をして、焼き切ってしまおうと考えた。俺はここで終わるような存在でないのだから大丈夫。そう自身を叱咤し、そのまま焼き切った。

急激に身体が軽くなる。その場で軽くジャンプするが、前までの俺には到底出せないような高さまで飛べた。今なら、人間だったら腕力では誰にも劣らないだろう。それに、思考加速も、先ほどより加速しており、常人にとっての1秒が10000秒に感じる。

だが、まだ決定的な切り札が無い。絶対的な止めの一撃。それがあれば、勝てるだろう。この一族は500年の歴史を持つらしいから、一度蔵を漁ってみよう。何かあるかもしれない。

蔵まで足を運ぼうとしたが、身体にうまく力が入らなくなっていた。俺はその場に倒れた。

――――

「う、うん。ここは……」

「目が覚めたか。倒れていたのを見たとき、ヒヤヒヤしたぞ。蒼夜が敵わない程の強敵がこの屋敷に入り込んだのかとな。で、どうなんだ？」

「新しい技を試してた。その反動だと思う、たぶん」

「そうか……どんな技なんだ？」

「思考加速と並行思考を使って脳のリミッターを焼き切り、異常なパワーアップをするといった技だ」

「そうか……しかし封印するには大丈夫なんだが、殺すのには火力が足りないんじゃないか？」

「だから蔵に行けば何かあるかなって思い、行こうとした所で倒れ

「ただ」

じゃあ行つて来い、といって爺さんは部屋から出て行つた。程なくして俺も部屋から出る、もちろん蔵に行くためだ。もしかしたら俺以外の転生者が有効な武器を手に入れ、何らかの理由で使えなかつたという事も無い事もないかも知れない。そんな事を考えていると、いつの間にか蔵の入り口まで来ていた。

鍵を開け、薄暗い蔵の中に足を踏み入れる。カビくさく、とても保存する環境が良いとは言えない蔵の中に、書物がたくさん積み重なっていた武器類もそこそこの有るのだが、パツとした物が無かつた。

「はあ、外れか……また考えなきゃな」

そう思い、蔵の奥から入り口に戻ろうとする。しかし、何かに足を取られて転んでしまった。

「ついてねえな……」

通る時に何か倒してしまつたのだろうか。俺が躓いた場所を見てみると、そこには隠し扉があつた。いったい誰が何のために創つたのか分からないが、とにかく入ってみよう。

扉は思ったよりも軽く開いた。地下に続く階段がある。中は真つ暗で、ライトを取つて来ようと思つたが、本能がそれよりも先に奥に行く事を望んでいた。しばらく迷つたあげく、俺はライト無しで奥に入る事を決意した。

2、3回階段で足を滑らせそうになつたが、それでも慎重に階段を降りているつもりだった。だが足場がヌルヌルしているのだ。い

つ転けても不思議ではない中、ついに一番下まで降りきる事が出来た。

見なくても分かる、此処には何か凄い物があると。人が使つてはいけない物、本来なら人の目にはさらされてはいけない物。手を前に伸ばす指先に感じる、ひんやりした物体。俺は迷わずそれを掴み、引き抜いた。

「これは……」

青銅で出来た鋸、世界の始め、天と地を分けたといわれる物 -
エア

これで火力も充分なはず。しかし、これは神の武器だ、おそらく一度使うだけで俺は死んでしまうだろう。なら俺は相打つて、せいぜいこの儚い命を散らしてやるぜ。

この体の持ち主の家族には申し訳ないが、逆に俺がいて蒼夜の事を諦めきれないと思う。なら俺が死ねば、いずれは忘れる日が来るかも知れない。

まだ幼い姉や妹は、ほとんど顔を合わせた事のない俺を綺麗に忘れてくれるだろう。人が一人死んだ所で世界は変わらずに回る。そう言えば、一度目の死は自分のやりたい事をやったけど間接的には人の役に立ってたし、俺って案外人のために身を危険にさらすのが好きなのかな。

俺は平穩が好きだ、この思いを誰かに分かって欲しい。だから500年戦い続けたこの一族にも平穩が訪れますように……

やっぱ、柄じゃない。俺は、俺の平穩のために戦おう。それが間
接的に人のためになっているだけだ。

さあ明日、全部に蹴りをつけようか……

神殺し

一族を縛っていた神という名の鎖を解いた時、はたして真に一族は自由になるのか、それとも新たな因縁を生むのか……

第四話 神殺し

一族は普段、各自バラバラに過ごしているのだが、神と対峙する者が現れた時には、本家に帰ってくる。本家は一つの山を所有しており、そのほとんどを神と戦闘を行うための広場としている。足場は悪いが一族の人間は斜面でも普段と変わらない動きができるように訓練されている。

すでに一族の者は屋敷に集まっており、俺は爺さんと共に広場に來ていた。

「では、始めようか。お前はよく頑張った、最悪封印は絶対にしてもらわなければならないが……生きて帰って来い！」

「もちろんそうするぜ、てか死ぬ気なんか無いし。そういえば、俺が帰ってきたら俺は蒼夜じゃなくなるから」

「つまり、お前は一族を抜けるのか？」

「いや、蒼夜はもう死んだんだ、だから俺は零夜って名乗ることにする。森上零夜、どうだ良い名前だろ？」

「そうだな。じゃあ封印を解くぞ。くれぐれも第三の目には気を付けてろよ！」

爺さんには神の特徴を聞かされていた。その神の名はシヴァ。ヴェーダ神話の暴風雨神、ルドラを前身としている。暴風雨は、破壊的な風水害ももたらすが、同時に土地に水をもたらし植物を育て

るという二面性がある。そしてシヴァはルドラの特徴を受け継ぎ、インドのヒンドゥー教で3つの重要な神の一つに数えられている。世界の寿命が尽きた時、世界を破壊して次の世界創造に備える、これにより、シヴァは破壊を司っていることがわかる。そして爺さんに注意されていたことだがシヴァは両目の間には第3の目が開いており、怒る時には激しい炎が出て来て全てを焼き尽くす。幸い、直線にビームのような物らしいので、避けやすいが当たった瞬間決着が着く。

「シヴァか……厄介な相手だよな」

どうせ死ぬのだからエアを使って短期決戦に持ち込む方がいいか？まあ、戦況によって決めよう。

そう考えていると、震えるような存在感、圧迫感、そして神々しさが一度に俺を襲ってきた。予想以上の感覚に一瞬、地面に膝を着きそうになったが、気をしっかり持ちそれをこらえる。

「ふむ、前回よりも早いな。今回の敵は……なんじゃ子供か。子供が相手とは我を舐めておるな。まあいい、これを殺してさっさと強者との闘いに行こう」

「お前の方こそ俺を舐めすぎだぜ。神だろうがなんだろうが関係ない、お前は俺が殺す」

できる限りの殺気を込めてそう言い放つ。しかしシヴァは俺のこ

とを、やはりどうとも思っていないようだ。

「子供がなにを粹がっておるのだ。我との間にある格然とした差がわからぬのか？」

「理解していないとでも？お前が俺より強いことを前提に、俺はお

前を殺すって言ってるんだ！」

そう、エアが無ければ俺はシヴァに勝つことができない。それは悔しい事だが、勝つことが目的だ。そのために手段なんか選んでいいられない。

「ほう、我より弱いことを前提にな……奴と似ているな」

「奴つてのが誰かは知らないが、そろそろ行かせてもらうぜっ！」

俺はエア以外に、剣を一本と日本刀を一振り持ってきている。これらは、エアのように神性はなく、ただの武器であるがこれはシヴァの様子見するだけの使い捨てだ。

まず並行思考を使う。そして思考加速。これにより、周りの景色が普段の10000倍遅く見える。

俺は剣を片手に、シヴァに突っ込む。少しずつシヴァが避けているのを見て、そこから円運動に変えて回転斬りをする。腹に切っ先が掠ったみたいだが、全くといっていい程ダメージになっていない。

「ふむ、動きは悪くない様だ。では、次は我から行かせてもらうかな」

シヴァは、俺に向って拳を振り上げる。だがその攻撃も全てを見切ることができる。右、右、左、といったように避けていくが、見切れても避けきれない攻撃は仕方なく、受け流している。少しは反撃もしているが、どちらも無傷で、拉致があかない。

「ふむ、ただの子供かと思っただが、なかなかやるようだ。では、我も少しばかり本気を出すか……来い、トリシューラ」

シヴァの手には鉾が握られていた。爺さんからはトリシューラについて何も聞いていなかった。

「これはトリシューラ、お前の一族には一度も見せたことが無い武器だ。なに、子供が我に挑んできたんだ、少しくらい褒美を与えてもよかるう」

そういつて、トリシューラを構えるシヴァ。

「ならトリシューラなんか出さずに、そのまま殺られてくれよ、そっちの方がよっぽど褒美だったぜ」

俺も剣を構えてシヴァに向かい合う。

「私の武器を拝むことが出来るだけで、十分な褒美だ。いかに寛容な我でも勝負を蔑ろにするのは矜持に反するのでは……では続きをしよう」

シヴァは鉾を突き出し、挑発する。俺も剣を握り直し、どんな攻撃が来ても対処できる様にする。しかし、シヴァが行ったのはただの突きだった。不安を抱きながらも、それを避けて剣で腕を狙う。しかし、剣がシヴァの腕に当たることはなかった。突如、曲がったトリシューラが俺の腹を貫いたからだ。

「ハハハ、驚いたか？私のトリシューラは自由に曲げることができるのだ。そういえば、傷を負った森上の人間は急激に弱くなるのだつたな。今日は機嫌が良い、だからお前には私の最強の技で屠ってくれよう」

「その眉間にある第3の目で炎を出すのか？そんな当たるはずな

いだろ」

「まあそう言うな、今の我とお前の立ち位置を見るが良い」

俺は周りを見渡し、あることに気づく。俺の背後に屋敷があるのだ。ここで俺が避ければ、屋敷にいる人間が全員死ぬだろう。なら、エアにかけるしかない……

「俺が死ぬか、こいつがお前を切り裂くか、どちらが先か試すしか無さそうだ」

そういつて、背中につけていた鞘からエアを取り出す。

「それが切り札か……ちと、厄介だがこの勝負の決着を着けるには相応しい物だ。最後に、お前の名前を聞いてやろう」

「別に、聞いて欲しくないんだが、一応名乗っておく。俺は森上零夜。お前を殺す男だぜ！」

俺はエアを振り上げる。シヴァも第3の目を開眼させた。

「では決着を着けよう」

シヴァの言葉とともに直線に進んでくる全てを燃やし尽くすという、炎の線。それを切り裂く天と地を分けたエア。双方は少しの間均衡していたが、エアの方が押し始めた。

「人間如きに負けるものかっ！」

シヴァは気合を入れ、今度はエアの方が押される。

「シヴァ！これが俺の本気だ、リミッター解除！」

俺は脳内のリミッターを外し、自分が出せる最強の力を出し切った。

俺は、シヴァの肉体を切り裂いた感覚を得た。勝利を確信したその瞬間、俺の意識は無くなった。

――――

「封印されて本来の力が出せていなかったとはいえシヴァ様に勝つなんて、この子は凄いわね」

「パンドラか……」

「きつとこの子は偉大なカンピオーネとして名を馳せるでしょうね」

「ふんっ、その時は我が殺してやる。今の零夜を殺したところで、何の価値もない」

「そうね。ではシヴァ様祝福と憎悪をこの子に与えて頂戴！6人目の神殺し――もつとも若き魔王となる運命を得た子に聖なる言霊を捧げて頂戴！」

「よかるう。我と再び合間見えるまで死ぬことは許さんぞ！」

シヴァ神とパンドラと呼ばれた女はその場から消えていった。

神殺し（後書き）

主人公の零夜にはあと数体の神を殺して貰う予定です。

誤字脱字、アドバイスなどあれば感想またはメッセージしてください。

峰城家

？才能がある者となない者。一族の中ではある者がない者を虐げる。一族で言う才能とは、思考に関する事で、それ以外は特に重視してこなかった。

？虐げられた者は一度、一族から離れて独自に武術を始めた。それは400年前、一族の始まりから100年後のことである。だが、その武術を持っけてしても一族の力を上回ることができずに、一族から完全に追放された。

？今、一族の悲願であつた神殺しを成就させた者が現れたという報せを受け、400年間武術を極め続けた分家、峰城家の最後の反撃が始まる。

第五話 峰城家

？シヴァを倒して一週間たつた今でも、自分が生きていることが不思議でしかたがない。さらに俺には特殊な力が備わつた。シヴァが使つていた全てを焼き尽くす炎と、トリシューラだ。全てを焼き尽くす炎は、俺の場合手から出せるみたいだ。強い力なので一日に五発しか使えないようだが、これだけ使えれば十分だと思う。まあ、誰と戦うわけではないのだが、備えあれば憂いなしってことで、これには純粹に嬉しく思う。しかし、何故シヴァの能力を使えるようになったのか疑問だ。今はシヴァを殺したからってことで納得しておこう……

？この一週間、一族の者は毎日のように宴会をして過ごした。50年前からの悲願だつたのだから、仕方がないとしても仕事は大丈

夫なのか？と思ったのだが今、世間では春休みらしい。俺は学校にも行かず、修行ばかりしていたから月の感覚が狂っているのだと実感した。

？先程まで大騒ぎしていたが、今は酔い潰れて皆寝ている。

「その君、ちょっといい？」

？急に背後から声がかかった。驚いたが、今の言葉で一族の者ではなく余所者だということが分かる。なぜなら、一族の者なら俺のことを見間違う筈がないのだ。

「誰ですか、あなた？」

「ふふつ、あんまり警戒しないでもらえる？」

「知らない人が家にいて、警戒しないほうがおかしいでしょ」

「そのわりには余裕よね、流石一族の者だけあるわね。こんな小さな子でさえ教育してるなんて」

？一族のことは一般には隠されているはず。ならこの女は一族に何か関係のある人物。

「で、何が聞きたいんですか？」

「あら、以外。そっちから聞いて来るなんて……私が聞きたいのは、つい最近この家に封印されていた神を殺した人物が誰なのかってこと」

「さあ誰でしょうかね」

？何か面倒な臭いがプンプンする。ここは引き取ってもらうのが得策だろう。

「あら、いけずねえ。答えてくれないなら、痛い目を見るわよ。痛いのが好きなのなら、そのままシラを切っておきなさい」

「いい加減にして下さいよ。大人を呼びますよ？」

？俺の言葉に女は余裕な表情で、呼んでみなさいよ、と言ってきた。泥酔しているのを知っているようだ。

「はあ、じゃあ俺が追い返しますよ」

？

？俺は、思考加速を始める。その時、頭がズキリと痛んだ。だが、耐えれないことはないのものでそのまま続ける。

「あらあら、私に勝てるのかしら？」

「あなたより強い自信はありますよ」

？女の蹴りを避ける。女は洗練された動きで、回し蹴りや踵落とし、パンチなどを繰り返す。それらを全て避けて女の鳩尾にパンチを当てる。

「グッ……その年で私よりも強いのか。なかなか有能な子じゃない。まあ今日は一旦引かしてもらっわ」

？女はそう言っ、家から出て行った。頭痛が酷い。俺は、その場で倒れた。

- - - -

？懐かしい夢を見た。それは前世での一幕。今では遠い平穏のある生活。俺の生活には、必ず里奈がいた。ただの幼馴染なのに、毎日のように遊んだ。いつからか里奈のことが好きになって、他の男と

話している姿を見たら里奈が誰かと付き合ってしまいそうで、怖かった。

？この気持ちを解消するために、俺はその日、校舎の裏に里奈を呼び出した。

「急に呼び出してすまない」

「ううん。でも、改まってどうしたの？」

？里奈は不思議そうに首を傾げる。俺の心臓はすでに、張り裂けそうな程、高鳴っていた。

？少しの静寂。俺は、決心して口を開いた。

「里奈、好きだ」

？考えていた告白の言葉なんて、でてこなかった。頭が真っ白で、何を言っているかわからなくなって、口から出てきた好きという言葉。なんの飾りもない、俺の真剣な言葉。

「えっ……」

？しかし、返ってきたのは戸惑いだった。やはり、俺には脈なんて無かったのか。胸が痛いし目頭がこれ以上ないくらい熱い。里奈に涙は見せたくなかった。だから、此处から去ろうと背を向け走ろうとした。

「淳、私も……私もあなたが好き」

「えっ……」

？

？今度は俺が戸惑う番だった。そして、お互い顔を合わせて笑った。とても幸せだった、あの日。俺の恋が実ったあの日。

？俺等は誓ったんだ、何があってもずっと一緒だって。

- - -

？意識が浮上する。まだ頭が痛い、無理に思考加速しなければ大丈夫だ。でも、懐かしい夢を見たな。あの日からすでに10年も経つのか……結局、俺が死ぬまでずっと一緒だったし、約束は果たすことになったのかな？

？それにしても、平穩か……今生は平穩とは程遠い生活をしているから、なんか懐かしいな。今年度から小学校に通うらしいから、もうすぐ平穩が戻ってくる。

？そう思い、また瞼を閉じる。今は毎日修行して、神との対決があつて、宴会をやつて、そんな特別なことが続いて疲れているだけだから、そつとしておいて欲しい。

「ふふつ、あなただったのね。例の神殺しっていうのは」

？まただ、今だけそつとしておいて欲しいって思っていたのに。
？

「一旦引くとか言つてませんでしたっけ？」
「何言つてるの、それは昨日の話よ」

？つまり、一日中寝ていたってことか。

「で、何かしたんですか？」

「ええ、あなた以外の一族に毒を盛ったの。結構強力なやつで、最悪死に至るのよ」

？勘弁してくれよ、こんな時に。

「で、俺に何をさせたいんです？」

「あら冷静ねー、面白くないわね。まあいいわ、一族から追放された者がいるって知ってるかしら？」

「聞いたことがない」

「一族から追放された者達は集って新しい家を作ったの、峰城っていう名前の。峰城家は武術を磨いたの、だけど森上一族には敵わなかった。それでも峰城家は武術を磨き続けたの。そこで、あなたが神を殺した。これで、森上一族と峰城家には存在意義が無くなったの。最後に、峰城家は神を殺したあなたに戦いをして欲しいの。だって、森上の者の隣に立ちたかったのに最後まで立てなかった。それじゃあ400年間の努力が無駄になるじゃない！だから、あなたに一泡吹かせようと思ってね……」

？戦いか……もう、したくないんだよな。俺には平穩があればいいこれで終わりにしよう、これに勝てば戦いなんてもうしなくていいんだ。

「わかった、その勝負受けるよ。で、あんたと戦うのか？」

「あなたと同じ年の子がいるの。その子はあなたと同じように峰城家で一番強いだよ。場は整っている、あとは主役のあなたが舞台上上がるだけよ」

？ズキリと頭に痛みが走る。これじゃあ思考加速なしで戦うしかない。いざとなればトリシューラで決めよう。

？そうして連れて行かれた場所はシヴァと戦った広場だ。そこには、何人かの人間がいて離れた場所に、女の子が刀を携えて立っていた。

「あの子が相手か……」

「そうよ、あなたがあの子の前に立てば開始よ」

？俺は、少し頭を押さえてから溜息をつき、その場所へ向かった。

「よろしく」

？俺が言葉を投げ掛けたら、女の子はこちらをキッと睨みつけてきた。

「おいおい、なんでいきなり睨んでんだよ？」

「うるさい！」

？女の子は聞く耳を持たないようだ。

「俺は、森上零夜だ。改めてよろしく」

「峰城華鈴」

？一応、名前だけは返してきたが、こちらをずっと睨んだままだ。やりづらい……

「死ねえ！」

？いきなり切り掛かってきた華鈴。たしかにこの場にたったら開始だと言っていたが、死ねは無いだろ。

？俺はギリギリで刀を避ける。切っ先を俺の頭に向け、本気で殺しにきているようだった。

「来い、トリシューラ」

？思考加速を使えず、こちらを殺す気できている相手に出し惜しみは無用だ。

？突然現れたトリシューラに驚いている華鈴の右肩をトリシューラで突く。

「ひ、卑怯だぞっ！」

？肩を押さえながら言う華鈴に止めの一手として、トリシューラを頭に突きつける。

「これで、俺の勝ちだ」

「まだだっ！烈閃」

？華鈴は片手で刀を持ち、思考加速なしでは見切れない攻撃をしかけてきた。当然、俺はなす術もなくそれを全部くらい、全身に傷を負う。

「艦斬艇突！」

？これも避けれない。直感で、頭の攻撃は避けたが、それ以外は血がついていない所を探す方が苦労するといった具合だ。

「舐めているのか！何故避けない」

？避けないんじゃないくて、避けれないんだが……それすらも言えずに、ただ突っ立っているだけで精一杯な俺。

「答える、森上零夜！」

「……こんなの……俺じゃない」

？呟くような言葉に、華鈴は苛立ちを覚えているのか、さらにキツく俺を睨む。

「こんなの、俺の生き様じゃない！」

？俺の精一杯の叫びに、華鈴は驚いたような顔をする。

「確かに、俺は神を殺すっていったが、それは俺の求める平穩つてやつをわかって欲しかったからだ！で、神を殺してさあ、やっと平穩な暮らしに戻れると思ったのに……やってられっか！」

？自分で言っていて、さらに苛立ちが募る。

「何を言っているんだ！」

「こっからはもう手加減なしだ！さっさと終わらせて、帰って寝る」
？

「舐めるなー！閃朱螺旋！」

？俺は脳のリミッターを外し、トリシューラで華鈴の刀を折る。そして、華鈴の後ろに回って首筋に手刀を入れて、氣絶させる。

「グアアアアア！」

？やはり無理矢理に脳を使ったためか頭痛のあまり獣のような叫び

声を、上げてしまった。

「……ほんと、里奈と過ごしたあの時が懐かしいな……」

？気絶する前に呟いた、最後の言葉だった。

零夜と蒼夜

？不完全な上書き。一族はそうと気づかず、それを続けた。不完全な上書きより、精神から体が崩壊していき死に至る。転生者の多くが早死にする原因がこれだ。だが、これを越えた転生者は急激な成長をし、自身の最高の一撃を編み出すという。

第六話 零夜と蒼夜

「俺と結婚して下さい！」

？これは俺が里奈にプロポーズした時の夢。その日は遊園地に遊びに行つて、帰りに予約していたレストランでプロポーズをしたんだつた。

？里奈は嬉しそうにして頷いてくれたんだ。里奈が断ることは考えてなかったけど、それでも答えを聞いてホッとした。

？そんな幸せな空間に、ぽっかり穴があき、今の俺の姿をした誰かが出てきた。

「君の前世は見せてもらったよ。幸せそうな前世だったね」

「蒼夜か？」

？俺に上書きされたはずの存在に驚いた。

「そう。君の魂に上書きされた蒼夜だよ。まあ上書きが不完全だったから、こうして会話してるんだけど」

「不完全な上書きってことは、まだお前の意識がこの体を支配でき

る可能性があるのか？」

「一族の重みがない以上、多少は戸惑うかもしれないが蒼夜にとって生活しやすいだろう。」

「いくら不完全だつていつても、殆ど残つてないよ。僕の残った所も、君と話しているから減つていつてるんだ」

「お前を助けるにはどうしたらいい？」

「もう、楽にしてよ。四年間、見ているだけの生活は苦しいよ……不完全に転生した者は、必ず試練つてのを受けなければならない。それを出すのが、僕たちつてことさ。これが終われば楽になれる。だから、さつさと終わらせよう。君もその方が楽だろ？」

「もう……助けられないのか。ここで諦めるしかないのか？」

「僕から出す試練は3つ。一つ目は、今まで僕がため続けた嫉妬を消滅させること。二つ目は、憎しみ。三つ目は苦しみ。これらは形になって現れるけど、君に倒せるかな？あと、ここでは思考加速はもちろん、シヴァから奪った権能も使えないから気をつけてね」

「蒼夜の体がから赤い物が出てくる。それはとてつもなく大きく、そして苦しそうな姿をしていた。……これが蒼夜の嫉妬。俺が蒼夜の時間を奪った証。これを倒せば蒼夜は楽になれるのか？たぶん、楽になるっていうのは完全に俺に上書きされるって事。この三つを倒して蒼夜がきえれば、蒼夜の生きた証が無くなるのではないか？……それは悲しすぎる。」

「さあ、これが僕の嫉妬。君には一本の刀が渡される、それでこの怪物を倒せるかな？」

「刀なんていない」

？俺の言葉に蒼夜は驚いた表情をした。

「刀がなければ、僕の嫉妬を倒せないよ」

「別に、倒す必要はない。俺が、蒼夜の嫉妬も憎しみも苦しみも背負ってやる。お前の生きた証を残しといてやる！」

？ハッとした表情になった蒼夜の目に徐々に涙があふれる。

「零夜は優しいね。でも、倒さなきゃ次に進めない。零夜の意識は回復しないよ」

「だから、こいつを俺の中に取り込めばいいんだろ？」

？俺は嫉妬でできた怪物を指差して、そう言った。

「そうだけど、それじゃあ零夜が食われるかもしれない」

「大丈夫。俺を誰だと思ってんだ？森上蒼夜であり、零夜でもあるんだぜ、自分を信じる！」

？蒼夜は、俺を見つめて頷く。

「今ここにいる僕は嫉妬、憎しみ、苦しみで構成されてるんだ。だから、僕を取り込めればいいよ」

「なあ、取り込んだらお前はどうなるんだ？」

？これが一番気になる事だ。蒼夜に何も残らないのは、俺には耐えられない。

「次の生が始まる。だから僕のことは気にしないで」

「そっか……なら始めてくれ」

？俺がそう言うと、嫉妬を体内に直した蒼夜が俺の前に立つ。

「次の生を幸せに過ごせることを祈っておく」

？俺の言葉にニコリと微笑むと、そのまま俺の中に入ってくる。

？俺は強烈な痛みを待っていたが、何も起こらない。逆に、暖かい物が俺を満たしていた。

「これは……？」

「おめでとう。合格だよ」

？蒼夜に似ているが、纏った空気が全く違う人物が目の前にいた。

「合格？」

「そう。これは転生者に課された試練でもあり、強大な力を渡しても大丈夫か選別する試験でもあったんだ。君は見事に合格してくれたね。しかも、評価は最高。喜びなよ、新たな力が手に入るよ！」

「そんなことより、蒼夜は？」

？これが試験だったというなら、蒼夜のことも嘘だったのでは、と思った。

「あの子とはつくに新たな生を歩んでいるよ。今は、普通の家族と共に幸せな暮らしをしている」

「そっか……よかった」

「話を戻すけど大丈夫かな？」

「大丈夫だ、問題ない」

「僕は神。少し違う部分があるけど、まあ神とってくれて構わな

い。で、あの試験は倒した感情の分だけ、手に入る能力が減るんだ。そして、全部倒してしまつたら、寿命が削れていく。転生者のほとんどは全部倒しちゃうんだ。君のようなケースは1%くらいしかないんだ、誇っていいよ」

？とは言われたものの、俺は結局自分のことしか考えていない。蒼夜のことだって、俺ができる限りの罪滅ぼしをしないと罪悪感で潰れてしまいそうになるからだ。そのことを神に伝えたと、そう思えることも重要なんだよ、と言われた。

「もうすぐ、意識が回復するはず。自分の能力は自分で確かめてね。一応、回復、攻撃、防御の三つにしたいから」

？神はそう言うと言えていった。それと同時に、俺の意識も浮上していく。

- - - -

？峰城華鈴は転生者だ。試験と呼ばれる物はすでに受けている。私に前世で、自分よりも大切な人がいた。彼はいつたい今、どうしているのだろう。私を忘れて、のうのうと暮らしているのか、私がいなくなつたことを嘆いてくれているのか。

？彼はいつも平穏を求めている。だから私も平穏を求めよう。

？しかし私の転生した所は、武術をしている家系らしい。転生してからすぐに、修行に入った。なんでも、この家はある一族から追放された者達が集まってできたもので、その一族と一緒に封印されている神と戦いたいらしい。

？私は一族を恨んだ。私の平穩を返せ、転生してからの私の目標を返せ！と。私は一族を恨み続けることで、辛い修行も乗り越えることができた。

？そして4年後、一族の者が封印された神を殺したらしい。これで私の平穩が戻ってくる、という気持ちと、何のために修行していたんだろうという気持ちが生まれた。

？家の者も悔しがり、神を殺したものと私が戦うことになった。

？向こうは、こちらの気も知らずによろしくなんて言ってきた。ひどく腹が立った。そして望んだ戦い。

？結果は相打ち、とても神を殺した者の動きとは思えなかったが、最後のだけは別格だった。全ての動きが何百倍にも膨れ上がり、目で姿を負うのがやっとだった。

？首筋に攻撃され、気を失いかけたけど、何とかこらえる。向こうは、獣のような叫び声を上げて倒れた。最後に聞こえてきた、里奈という名前にドキリとする。私の前世の名前だ。

？うつん……そんなはずない。これは聞き間違い。でも、転生者かどうか、聞く価値はあるだろう。

？私の意識は途絶えた。

小学校

？少年は平穩を手に入れたと歓喜した。それが仮初の平穩だとは知らずに……

第七話 小学校

？俺が目を覚ました場所は、自分の部屋だった。目を覚ました時には、爺さんの顔が少しやつれていたのに驚いた。それ以上に俺のことを心配してくれていたんだとわかって、嬉しかった。

？一族は峰城家を認め、正式に分家として認めたらしい。それは喜ばしいことで、一族の因縁のような物はなくなり、この一族にも平穩な日々が戻ってくる。

？俺の精神には平穩が必要だ。いや、俺に関わらず誰にでも平穩というものは必要不可欠だろう。俺は一週間後から小学二年生に編入して、まったりと過ごすつもりだ。

？いくら神を殺したからといって、鍛錬を怠るなよと言われたが、思考加速や並行思考をすると頭痛がする。爺さんに相談すると、頭を酷使し過ぎていると診断され、編入するまでは鍛錬をしなくていいようになった。

？小学校に通うには、この屋敷からでは不便ということとで親の家に帰るらしい。親とは転生初日から会っていないので、不安も残るがまあ、なんとかなるだろう。

？ちなみに、峰城華鈴も同じ学校に編入するらしい。そういえば俺

のことを睨んでいたが、何か恨みでもあったのだろうか？ 今度会った時に聞いてみよう。

？と、ここまで思考した時、ふと神から貰った力のことを思い出す。攻撃、防御、回復と言われたが、俺には必要なさそうだ。というか、使う機会がないほうがいい。

？とりあえず、腹が減ったから飯を食べよう。ちょうど昼飯の時間だし、婆さんも何か作ってるはず。

？居間に入ると、母さんと父さんと姉と妹がいた。俺を迎えに来たのだろう。そろそろこの屋敷から出ないといけないと思うと、寂しくなる。

？俺が入って来たのに気づいた母さんが、こちらを向いた。俺のことを罵るのかと思い、気構えていると此方に来て抱きしめられた。

「蒼夜……いえ、零夜だったわね。たとえあなたの魂が変わったとしても、あなたは私の息子。そう気付いたの。それに、蒼夜との決別もできたの。だから私のことを本当の家族と思って……」

？母さんの目からは涙が流れていた。俺は母さんを抱きしめて、頷く。

「俺が転生してからはずっと母さんのことを家族って思ってたよ」

？前の家族はもうとつくに諦めた。転生する前に飛行機がジャックされた時から。俺の心残りは蒼夜だけだったが、次の生を歩み始めているときいて、安心した。

？だから、この生を最高に楽しもう。大事な人と一生を添い遂げよう。

「零夜、母さんいつまでもそうしてないで、座りなさい。美希も杏も待ってるぞ」

？抱きしめあつたままの俺と母さんな痺れを切らした父さんが、そう呼びかける。

？父さんの隣にいる姉さんの美希と妹の杏が、そわそわしていた。

？俺は父さん達の対面に座り、母は俺の隣に座る。

「零夜は明日この家を、出て家に来る事になっている。今日一日はこの家で自由にしてくれ。長いこと住んでたんだから、すぐに引き離すのもあれだしな。族長もお前のことを可愛がっていたようだから、今日は族長と一緒にいてくれ。今日俺たちと話す機会はこれだけだが何か質問はあるか？」

「特にない」

「そうか……じゃあまた明日」

？そう言い終わると、俺は部屋から追い出された。そして、長い廊下を歩き、爺さんの部屋に入った。

「爺さん、俺は明日からこの家を去ることになった」
「知っている」

？いつもの爺さんらしくない覇気のない声だった。

「俺はこの家にいられて幸せだった。この幸せに支えられて生きてきたんだ」

？二度と会えないわけでもないのに、別れというものは酷く寂しいものだ。

「そうか……僕も、零夜がいてくれて楽しかった。まあ、今生の別れでもないのだから辛気臭い雰囲気にするな」

「それでも毎日还是会えないだろ」

「そうだな……じゃあ体でも動かそうか」

？俺がこの家にいられる最後の日でさえ俺と爺さんは普段と変わらず、体を鍛えることで一日を潰した。

？翌日、家の前に停めていた車に家族全員で乗り込んだ。爺さんは始終無言だったが、心なしか、寂しそうにしていた。

「5時間かかるから、眠たかったら寝てていいぞ」

？父さんがそう言っているがそんな気分ではなかった。

？美希と杏も眠たくないのか、二人で話している。暇なので、貰った力のうち比較的役に立ちそうな回復について考える。

？回復は他人にも使えるのか、それとも自分のみなのか。それ以前に回復の発動方法が不明だ。

？俺は指を血が出るくらいまで噛み、治れと念じてみた。しかし、何の反応もなく血は止まることなく流れ出ている。

？次に、空間に傷を治すという概念を付けると念じる。すると、今まで流れていた血が止まり、傷も塞がった。血を拭くと、歯の後さえ残っていなかった。

？なるほど、こういう風に使うのか。もう一度、指を噛み今度は空間に、俺についた傷以外を癒すという概念を付けようとする。これも成功したようで、俺の指の怪我は治らなかった。

？次に反対の指も噛み、右指だけ傷を癒すという概念を空間につける。これも成功。

？実験した後、すぐに眠気が襲ってきた。慣れない力を使うと余計に体力を消費するのかな、とか考えながら俺は眠った。

- - -

「……き……い！……きなさい！おきなさい！」

？どうやら着いたようで、俺は母さんに起こされた。母さんに着いていき、家に入る。家は三階建てで、少し広々している。俺の部屋は三階にあるらしい。自分の部屋に入ると、屋敷から持ってきた自分の荷物を直し、机に向かう。

「高校の問題くらい楽に解けないとな……」

？俺は数少ない自分の荷物から分厚い問題集を出し、勉強する。

？もともと、勉強はできた方なのでスラスラと解けたが、偶に解けない問題があり、答えを参考にしながらも頑張って解いていく。

？小学校に編入したら、あまり勉強できないだろうからできる限りの勉強をしておきたい。

？だから小学校に編入するまでの一週間は勉強をして過ごした。

？そして、始業式の日が訪れた……

「じゃあ行つてきます」

？美希と杏は先に登校した。俺は鍛錬をしたために、二人よりも少しだけ遅くなってしまった。

？時間に余裕はあるが、一応早歩きで登校している。

？学校まであと少しという場所で、美希と杏に追いつく。

「美希、杏、おはよう」

「おはようレイ。それとお姉ちゃんって言ってって何回も言ってるでしょ！」

「レイお兄ちゃん、おはよう」

？美希と杏との仲は良好だが、美希がどうしてもお姉ちゃんと呼んで欲しいようだ。でも、小学校相手にお姉ちゃんとは言いにくい。なにしろ精神年齢は29歳なのだから。

？美希はむくれていたが、無事に学校に到着する。始業式は体育館でするようで、人も結構集まっていた。とりあえず職員室に呼ばれていたので、二人と別れる。

？校内は中々広く、手間取りながらも職員室を見つけて、中に入る。

「中尾先生はいますか？」

「ああ、中尾先生ならあの人だよ」

？近くにいた初老の先生に聞き、担任の中尾先生の元へ行く。

「おはようございます。中尾先生のクラスに編入する、森上零夜です」

「そう、君が森上君ね。私は中尾圭子、中尾先生でも圭子先生でも、どちらでもいいわよ」

？中尾先生は微笑み、そして着いてきて、と言った。

？手を引かれてやってきたのは体育館。俺は2年2組に編入するらしく、2年2組の列の最後尾に並ぶように指示された。列についてから間もなく、始業式が始まった。

「……………これで始業式を終わります。1年1組から順にクラスごとに教室へ向かって下さい」

？校長の話を聞き流し、中尾先生の引率の元、教室へ向かう。

？教室の前で待っておくように言われ、他の生徒達が入っている様子を眺めていた。

？そういえば、華鈴も同じ学年なんだから近くにいるはず……

？あたりを見渡すと、2年1組の前で、壁にもたれかかり、腕を組みながら目を瞑っている華鈴がいた。

「久しぶりだな」

？俺が声をかけると、目を開けてこちらを見てくる。

「この前はすまなかったな、あの時は気が立っていたんだ」

？俺が出した手を握る華鈴。

「それにしても平穏か……いいねえ、俺も後は平穏に暮らしていきたいものだ」

？華鈴は少し驚いた顔をしたが、すぐさま質問してきた。

「転生つて知ってるか？」

？

？この質問に驚いたが、俺も転生者なんだから近くにいてもおかしくないな、と思いたくはない。それに、いくら思考加速はできなかったからとはいえ、俺の動きを圧倒した六歳児は普通ではありえないだろう。第一、修行に耐えられるはずがない。

「知ってるよ。俺も転生者だし」

「やはりそうか……この前戦った時、お前は無意識かはわからないが、里奈と喧いたんだ。まさかとは思うが、その里奈という女の子を言ってくれないか？」

「田中だ。田中里奈」

？華鈴は興奮したように、俺の肩に掴み掛かってきた。そして、俺の前世の名前を聞いてきた。

「藤宮淳だ。……それがどうかしたか？」

？急に抱きしめられた。さらに華鈴は泣いているようだったので、そつと背中を撫でてあげた。

「急にどうしたんだ、何か辛いことでも思い出したとか？」

？華鈴は首を横に振り、顔を俺の耳に寄せてきた。

「私が里奈だよ」

？里奈……確かにそう聞こえた。俺は嬉しさと悲しみで微妙な気分になった。

「そつか。里奈も死んじゃたんだ……」

「うん。でも、また淳に会えたからあの生にはもう悔いはないよ。だって淳だけだもの、私の生きがいは……」

「俺もー」

？俺が里奈に伝える前に、中尾先生から呼ばれた。後で、と伝えて教室に入ると、クラスメイト全員がこちらを見ており、少し緊張した。

？黒板の前に立つと、チョークで名前を書き、無難に自己紹介をする。そして、空いている席に座れと言われ、窓際から二番目の一番後ろという中々の席に着席した。

「はい、じゃあ明日からいつも通りの授業なので、教科書を忘れないようにね」

？そう言っただけで解散となった。

「俺も帰ろうと、席を立とうとすると、隣の席の男の子が話しかけてきた。」

「零夜君、俺は草薙護堂っていうんだ。よろしくね」

「よろしく。それと、俺のことはレイでいいぞ」

「うん。レイも護堂って呼んでね！」

「これが、後の親友である草薙護堂との初めての会話だった。」

小学校（後書き）

今回は急ぎ足でした。次回あたりから原作に入っていくと思いますのでよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1692o/>

破壊神殺しの転生者

2010年10月24日02時49分発行